

第 10 回 日本臨床薬理学会中国・四国地方会

プログラムおよび講演要旨

会 期

令和 8 年 7 月 4 日(土曜日)

会 場

松山市総合コミュニティセンター

会 長

永井 将弘(愛媛大学医学部附属病院 臨床薬理神経内科)

目次

1. 開催概要.....2
 2. 会場のご案内.....3~4
 3. 日程表.....5
 4. プログラム.....6~9
 5. 抄録10~15
-

開催概要

学会名

第 10 回日本臨床薬理学会中国・四国地方会

会期

令和 8 年 7 月 4 日(土曜日) 13 時～18 時

会場

松山市総合コミュニティセンター

会長

永井 将弘(愛媛大学医学部附属病院 臨床薬理神経内科)

事務局

第 10 回 日本臨床薬理学会中国・四国地方会事務局

(愛媛大学医学部附属病院臨床薬理神経内科 内)

担当: 安藤利奈

〒791-0295 愛媛県東温市志津川 454

TEL: 089-960-5095 FAX: 089-960-5938

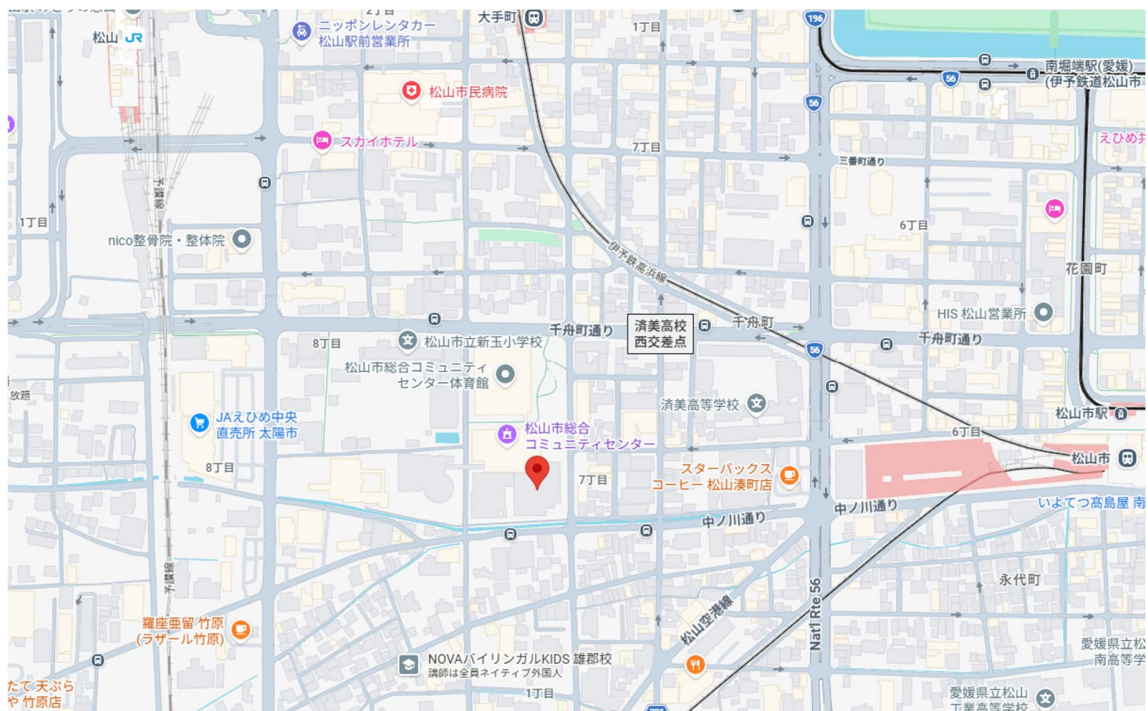
E-mail: cpt-2026@m.ehime-u.ac.jp

会場のご案内

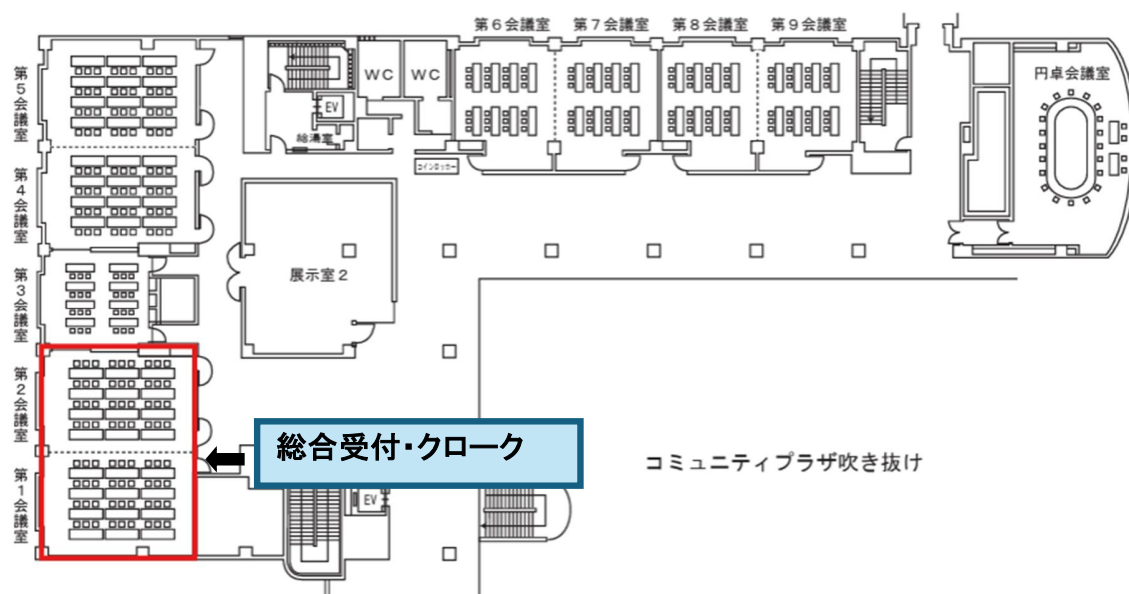
松山市総合コミュニティセンター

〒790-0012 愛媛県松山市湊町七丁目 5 番地

電話:089-921-8222 FAX:089-931-3304



コミュニティプラザ2F



コミュニティプラザ3F



日程表

	第 1 会場 （大会議室）	
13:00～13:05	開会挨拶	ポスター貼付／ 閲覧
13:05～14:05	特別講演 抗コリン薬と Hypertensive dementia ～認知症を予防するためにできること～ 茂木 正樹	
14:05～14:15		
14:15～15:15	ポスター発表・総合討論	
15:15～15:25		ポスター閲覧
15:25～16:25	アフタヌーンセミナー 不眠症診療の最新のトピックス ～睡眠障害の標榜と新たな治療選択～ 岡 靖哲 共催：エーザイ株式会社	
16:25～16:35		
16:35～17:45	シンポジウム 臨床薬理学研究に貢献する 医療ビッグデータ 岩城 寛尚 新村 貴博 武智 研志	ポスター撤去
17:45～	閉会挨拶	

プログラム

特別講演

座長

島根大学医学部薬理学講座 和田 孝一郎

抗コリン薬と Hypertensive dementia
～認知症を予防するためにできること～

演者: 茂木 正樹

愛媛大学大学院医学系研究科分子心血管生物・薬理学

アフタヌーンセミナー

座長

愛媛大学医学部附属病院臨床薬理神経内科 永井 将弘

不眠症診療の最新のトピックス
～睡眠障害の標榜と新たな治療選択～

演者: 岡 靖哲

愛媛大学医学部附属病院 睡眠医療センター

共催: エーザイ株式会社

シンポジウム

座長

岡山大学病院 薬剤部 座間味 義人

臨床薬理学研究に貢献する医療ビッグデータ

シンポジウム①

「オープンデータ・公開データを活用した創薬研究の可能性」

演者：岩城 寛尚 アメリカ国立衛生研究所(NIH)

シンポジウム②

「医療ビッグデータを活用した抗菌薬の臨床的有用性評価」

演者：新村 貴博 徳島大学病院 薬剤部

シンポジウム③

「医療ビッグデータを活用したドラッグリポジショニングによる創薬研究」

演者：武智 研志 松山大学 薬学部

《一般演題》 ポスター発表 4 分、討論 2 分

ポスターセッション 1：演題番号 P1-1～5 (14:15～14:45)

座長：島根大学医学部薬理学講座 和田 孝一郎

P1-1. パーキンソン病患者におけるレボドパ／カルビドパ薬物動態の性差と
関連因子の検討

愛媛大学医学部附属病院臨床薬理神経内科
宮上 紀之

P1-2. パーキンソン病における H. pylori 感染・除菌とレボドパ薬物動態・
臨床症状の関連

愛媛大学大学院医学系研究科臨床薬理学
山本 温人

P1-3. 老化ミクログリアの置換によるパーキンソン病病態の制御

愛媛大学大学院医学系研究科臨床薬理学
竹永 絢音

P1-4. Extracellular vesicles contribute to the metabolism of ATTRv
amyloidosis

愛媛大学大学院医学系研究科薬理学
河原 裕憲

P1-5. 胎内喫煙曝露による次世代マウスの肝・代謝機能障害と母体
高脂肪食の修飾効果

愛媛大学大学院医学系研究科薬理学
茂木 正樹

ポスターセッション 2：演題番号 P2-1～5 (14:45～15:15)

座長：山口大学医学部附属病院 薬剤部 北原 隆志

P2-1. 愛媛大学医学部附属病院における睡眠薬フォーミュラの作成

愛媛大学医学部附属病院薬剤部
峠 雄太

P2-2. 小児患者におけるバンコマイシン TDM 解析ソフトの予測精度評価
—初回投与設計およびベイズ推定の比較—

愛媛大学医学部附属病院薬剤部
黒河 幸朗

P2-3. 医療ビッグデータを活用した MRSA 敗血症に対するバンコマイシンと
テイコプラニンの有用性の比較検討

徳島大学大学院医歯薬学研究部臨床薬理学分野
佐藤 康敬

P2-4. 小児における ALK 阻害薬及び MEK 阻害薬の安全性シグナル解析
—WHO 国際有害事象データベース (VigiBase) を用いた検討—

岡山大学病院薬剤部
田中 雄太

P2-5. 電子カルテベンダー変更に伴う治験患者併用薬チェック支援システム
の再構築

広島大学病院薬剤部
村瀬 哲也

抄 録

《特別講演》



抗コリン薬と Hypertensive dementia ～認知症を予防するためにできること～

愛媛大学大学院医学系研究科・薬理学 茂木正樹

日本の高血圧患者は 4300 万人と言われているが、臨床薬理学会や薬理学会で高血圧の話題が取り上げられることは殆どない。アンメットメディカルニーズが殆どない疾患と考えられる高血圧は、薬の専門家には興味が薄いのかもしれない。しかし、日常診療では高血圧の患者は数多おり、原因も多種多様で降圧に苦労することも多く、昨年、日本高血圧学会から「高血圧管理・治療ガイドライン 2025(JSH2025)」が発表されたこともあり、今回高血圧・降圧治療について改めて概説したい。また、血圧が認知症に与える影響についても、臨床的あるいは基礎的な側面からも理解が進んでおり、血圧に関連する認知症(hypertensive dementia)についても概説したい。さらに、抗認知症薬としてアセチルコリンの増加を意図した治療が行われてきたように、抗コリン作用は認知症に悪影響を与え、また抗コリン作用は生活の質を低下させる有害事象を誘導する。欧米では 2010 年前後に抗コリン薬のリスクスケールが相次いで発表され、抗コリン薬への関心が高まったが、日本では一昨年、日本老年薬学会から「日本版抗コリン薬リスクスケール」が発表され、抗コリン薬への関心が高まっている。高齢者のポリファーマシー対策として抗コリン薬のリスクを把握し、薬の有害事象を減らすためのアクションを起こすことは非常に重要と考える。このように、認知症に関連して、降圧薬や抗コリン薬など、古典的な薬についての話をさせて頂きたいと思います。

《略歴》

1994 年 3 月	大阪大学医学部医学科 卒業
1994 年 6 月	大阪大学医学部附属病院第四内科
1995 年 6 月	大阪府立病院勤務
1997 年 6 月	大阪大学大学院医学系研究科 生体制御部門加齢医学講座
2001 年 3 月	医学博士取得 (大阪大学)
2001 年 7 月	タフツ大学セントエリザベス病院
2001 年 11 月	ボストン大学医学部 分子心臓病学
2003 年 7 月	愛媛大学医学部 老年医学講座 助手
2004 年 11 月	愛媛大学医学部 医化学心血管生物学分野 助手
2005 年 4 月	愛媛大学医学部 医化学心血管生物学分野 特任講師
2006 年 4 月	愛媛大学大学院医学系研究科 分子心血管生物・薬理学 特任講師
2011 年 7 月	大学大学院医学系研究科 分子心血管生物・薬理学 正講師
2012 年 8 月	愛媛大学大学院医学系研究科 分子心血管生物・薬理学 准教授
2017 年 12 月	愛媛大学大学院医学系研究科 薬理学 教授(現職)

《アフタヌーンセミナー》



不眠症診療の最新のトピックス ～睡眠障害の標榜と新たな治療選択～

愛媛大学医学部附属病院 睡眠医療センター 岡 靖哲

睡眠の病気で悩む方は多いが、どこを受診したらよいかわからないという声もあった。2026 年 6 月より「睡眠障害」を標榜科名に付記することができるようになった。さらに、不眠症の認知行動療法も保険収載されることとなり、睡眠障害の診療に注目が集まっている。

睡眠の疾患の中でも頻度が高い不眠症治療において、睡眠薬を用いた薬物治療は広く行われているが、睡眠薬の多剤併用や長期投与による問題点が懸念されるようになり、睡眠薬の適正使用の観点から、まず睡眠衛生指導を行うことや、治療効果とリスクの双方を考慮すること、治療効果を評価して休薬トライアルを行うことが推奨されている。

睡眠薬は、作用機序の違いによって、ベンゾジアゼピン系睡眠薬、非ベンゾジアゼピン系睡眠薬、メラトニン受容体作動薬、オレキシン受容体拮抗薬に大別される。ベンゾジアゼピン系睡眠薬も非ベンゾジアゼピン系睡眠薬も GABAA 受容体に作用して働くことは共通であり、近年は GABAA 受容体作動薬と総称されることも多い。非ベンゾジアゼピン系睡眠薬は、長期に服用しても耐性が生じにくく、中断したときの反跳性不眠を生じにくいこと、筋弛緩作用も少ないことから、ベンゾジアゼピン系睡眠薬より安全性が高いとされる。メラトニン受容体作動薬は、体内時計と関連するメラトニンの受容体に作用して働く薬剤であり、耐性、反跳性不眠を生じにくく、筋弛緩作用はみられない。安全性は高いが、少なくとも 2 週間以上継続して服用することで効果が得られる薬剤である。

オレキシン受容体拮抗薬は、覚醒系を抑制することにより不眠を改善することを目的とした薬剤であり、第一選択薬と考えられるようになりつつある。本邦では 4 種類の薬剤が上市されており、オレキシン受容体拮抗薬の特徴に応じた使い分けが可能となっている。愛媛大学医学部附属病院が 2025 年 12 月に作成した睡眠薬フォーミュラにおいても、効果、安全性、特に転倒・転落リスクを考慮し、オレキシン受容体拮抗薬を推奨の上位に位置付けている。

《略歴》

1992 年 京都大学医学部 卒業
1999 年 University College London 臨床神経科学部門 (M.Sc. 取得)
2005 年 京都大学大学院 医学研究科 臨床神経学分野 (博士取得)
2005 年 財団法人神経研究所附属 代々木睡眠クリニック 副院長
2007 年 広島睡眠クリニック 院長
2012 年 愛媛大学医学部附属病院 睡眠医療センター長・准教授
2022 年 愛媛大学 特任教授

P1 ポスター

P1-2 パーキンソン病における *H. pylori* 感染・除菌とレボドパ薬物動態・臨床症状の関連

1) 愛媛大学 医学部医学科
2) 済生会松山病院 脳神経内科
3) 愛媛大学大学院医学系研究科 臨床薬理学
山本 温人^{1,3)}, 宮上 紀之^{2,3)}, 永井 将弘³⁾

【目的】パーキンソン病(PD)における *H. pylori* 感染および除菌歴が、レボドパの薬物動態と臨床症状に及ぼす影響を検討した。

【方法】レボドパ/カルビドパ内服後に血中濃度測定と尿素呼吸試験を実施した PD 患者 40 例を後方視的に検討し、感染・除菌歴と薬物動態および臨床症状との関連を解析した。

【結果】薬物動態パラメータ(C_{max}, T_{max}, AUC 等)に感染・除菌歴による有意差は認められなかった。一方、運動症状を示す MDS-UPDRS partIII スコアは、年齢・性別で調整後も除菌群で有意に低値であった。

【結論】*H. pylori* 感染や除菌の有無はレボドパの薬物動態に直接影響しなかったが、除菌自体が薬物動態以外の要因を介して運動症状に影響を与えた可能性がある。

P1-1 パーキンソン病患者におけるレボドパ／カルビドパ薬物動態の性差と関連因子の検討

1) 済生会松山病院 脳神経内科
2) 愛媛大学 臨床薬理神経内科
宮上 紀之¹⁾²⁾, 永井 将弘²⁾

【背景】レボドパの薬物動態には個人差が大きく、女性で血中曝露量が高いことが報告されている。一方、併用薬であるカルビドパの薬物動態における性差は明らかでない。本研究では、パーキンソン病(PD)患者におけるレボドパおよびカルビドパの薬物動態の性差と、レボドパ曝露量に関連する因子を検討した。

【方法】空腹時にレボドパ／カルビドパ配合剤を内服後、薬物動態評価を実施した PD 患者を後方視的に解析した。C_{max}, T_{max}, AUC を算出し、AUC 関連因子を重回帰分析で評価した。

【結果】PD 患者 42 例(女性 21 例、男性 21 例)を対象とした。レボドパ AUC は女性で有意に高値であったが、カルビドパ AUC では差を認めなかった。重回帰分析では、女性であることはレボドパ AUC 増加と独立して関連し、女性ではレボドパ曝露量が 21.9%高いことが推定された。

【結論】PD 患者ではレボドパの薬物動態に性差が認められ、カルビドパへの影響は限定的である可能性が示唆された。

P1-3 老化ミクログリアの置換によるパーキンソン病病態の制御

1) 愛媛大学 医学部医学科
2) 愛媛大学大学院医学系研究科 臨床薬理学
3) 愛媛大学医学部麻酔・周術期学講座
4) 愛媛大学医学部附属病院先端医療創生センター
竹永 絢音^{1,2)}, 宮上 紀之²⁾, ME. Choudhury³⁾, 山本 温人^{1,2)}, 中條 滉太^{1,2)}, 塩川 大介⁴⁾, 永井 将弘²⁾

パーキンソン病(PD)患者では、活性化ミクログリアが増加することが知られており、ミクログリアを介した神経炎症が病態進行に重要な役割を果たすことが示唆されている。そこで、加齢に伴い機能不全に陥ったミクログリアを置換すると、PD 病態にどのような影響を与えるかを検討した。加齢マウスのミクログリアを除去し、再増殖した後、MPTP により PD モデルを作成した。結果、再増殖群ではミクログリアの形態が正常化し、運動機能が改善した。snRNA-seq 解析ではミクログリアの脂質代謝や、神経細胞のシナプス小胞サイクル・軸索輸送に関わる遺伝子群が有意に回復していた。以上より、ミクログリア置換は、加齢 PD モデルマウスにおいて神経機能の維持に必要な細胞内環境の正常化を介し、PD 症状を改善させる可能性が示唆された。

P1-4 Extracellular vesicles contribute to the metabolism of ATTRv amyloidosis

愛媛大学 医学部 薬理学
河原 裕憲

Hereditary transthyretin amyloidosis (ATTRv amyloidosis), caused by variants in the transthyretin (TTR) gene, is characterized by systemic TTR amyloid deposition and progressive neurological and cardiac symptoms. Although small extracellular vesicles (EVs) are known to interact with amyloid proteins, their role in ATTRv amyloidosis remains unclear. Here, we analyzed serum-derived EVs and found that EVs promote TTR amyloid formation on EV membranes and influence cellular TTR deposition. Human serum-derived EVs also modulated TTR aggregation and deposition. Notably, ATTRv amyloidosis patients showed lower levels of TTR aggregates in serum-derived EVs than healthy controls. These findings suggest that EVs contribute to TTR amyloid metabolism and that EV-associated TTR may serve as a potential biomarker and therapeutic target for ATTRv amyloidosis.

P2 ポスター

P1-5 胎内喫煙曝露による次世代マウスの肝・代謝機能障害と母体高脂肪食の修飾効果

1) 愛媛大学大学院医学系研究科・薬理学
2) 愛媛大学 臨床薬理神経内科
茂木 正樹¹⁾, 矢野 葵梨²⁾

【目的】妊娠中の母体栄養状態および喫煙曝露が次世代の疾患感受性に及ぼす影響を検討した。

【方法】C57BL/6N 雌マウスに通常食または高脂肪食を妊娠前6週間投与し、妊娠10日目よりCSEまたは生理食塩水を持続皮下投与した。出生アウトカム、出生仔のトランスクリプトーム、39週齢での生化学・組織学的解析を行った。

【結果】HFD群では母体体重が増加し、CSEは摂食行動および出生アウトカムに影響した。CSE曝露仔では肝・腎機能関連遺伝子の変動が認められ、老年期にALT、AST、LDHおよび血糖上昇が観察された。一方、HFD環境下ではCSEによる悪影響が一部抑制される傾向を示した。

【結論】妊娠中のCSE曝露は次世代の肝機能および糖代謝異常を惹起する可能性があり、胎内環境が成体期疾患リスクを規定することが示唆された。

P2-1 愛媛大学医学部附属病院における睡眠薬フォーミュラリ作成

1) 愛媛大学医学部附属病院 薬剤部
2) 愛媛大学医学部附属病院 睡眠医療センター
3) 愛媛大学医学部附属病院

峠 雄太¹⁾, 岡 靖哲²⁾, 坂本 裕哉¹⁾, 睡眠薬フォーミュラリワーキンググループ³⁾, 飛鷹 範明¹⁾, 田中 守¹⁾

【背景・目的】近年、従来の睡眠薬と比較して安全性が高いオレキシン受容体拮抗薬が複数上市されている。これにより、不眠治療の選択肢が広がる一方、非専門医にとって薬剤選択に迷う場面も増えている。そこで、睡眠薬の標準的な使用方法の推奨を提案し、適正使用を推進することを目的として、院内フォーミュラリを作成した。

【方法】2025年4月に多職種で構成されるワーキンググループを設置して協議を重ねた。推奨薬剤の選定には、当院での処方動向や診療ガイドライン等を参考にした。

【結果・考察】計6回の会議を経てフォーミュラリを作成し、2025年12月に公表した。本フォーミュラリでは、主にオレキシン受容体拮抗薬について、不眠症状のタイプに応じて推奨薬剤を設定した。一般成人と区別し、高齢者やせん妄ハイリスク患者に対する推奨も設定した。今後はフォーミュラリの周知を進め、薬剤選択の変化や適正使用への影響を評価する予定である。

P2-2 小児患者におけるバンコマイシン TDM 解析ソフトの予測精度評価—初回投与設計およびベイズ推定の比較— 愛媛大学医学部附属病院 薬剤部 黒河 幸朗, 木村 博史, 矢野 賢明, 峠 雄太, 山下 登, 飛鷹 範明, 田中 守 バンコマイシン(VCM)の投与を受けた小児患者において、TDM 解析ソフト(PAT と S-TDM(SHIONOGI-VCM-TDM Ver.2009: S-TDM))の予測精度を比較評価した。2020 年 4 月から 2025 年 3 月までに愛媛大学医学部附属病院で VCM 投与を受けた小児患者 47 例を対象とした。初回 TDM 時の実測値と各ソフトの予測値を比較し、予測精度指標として平均予測誤差(ME)および平均絶対予測誤差(MAE)を算出した。初回投与設計時の予測性は、ME および MAE とともに PAT が S-TDM より有意に優れていた。一方、ベイズ推定時にも両者間に有意差を認めたが、両解析ソフトとも予測誤差は小さく、臨床的影響は限定的と考えられた。以上より、小児患者における VCM の初回投与設計において、PAT は S-TDM より高い予測精度を示し、適切な投与設計に有用である可能性が示唆された。	P2-4 小児における ALK 阻害薬及び MEK 阻害薬の安全性シグナル解析—WHO 国際有害事象データベース(VigiBase)を用いた検討— 1) 岡山大学病院 薬剤部 2) 岡山大学 臨床薬理学 3) 岡山大学学術研究院 医療開発領域 薬剤部 田中 雄太¹⁾, 中谷 真緒²⁾, 槇田 崇志¹⁾, 濱野 裕章^{2,3)}, 座間味 義人^{2,3)} 【目的】小児がん領域では分子標的薬の適応拡大が進む一方、小児における安全性情報は限られている。本研究では WHO 国際有害事象データベース(VigiBase)を用いて、小児における抗がん薬関連有害事象の報告動向と ALK 阻害薬、MEK 阻害薬の安全性シグナルを評価した。 【方法】18 歳未満の有害事象報告を対象に報告動向を解析した。さらに報告数の多かった ALK 阻害薬及び MEK 阻害薬について、小児と成人を比較した SOC 単位の不均衡解析を実施した。 【結果】有害事象報告数及び死亡転帰報告数は経年的に増加していた。ALK 阻害薬では代謝・栄養障害、感染症、胃腸障害等、MEK 阻害薬ではさらに内分泌障害、皮膚障害、神経系障害等でシグナルが認められた。 【結論】両剤で成人と異なる安全性プロファイルを示す可能性が示唆された。小規模治験や成人中心の既存情報のみに依存せず、リアルワールドデータを活用した小児における継続的な安全性評価と適切なリスク管理が重要である。
P2-3 医療ビッグデータを活用した MRSA 敗血症に対するバンコマイシンとテイコプラニンの有用性の比較検討 1) 徳島大学大学院医歯薬学研究所 臨床薬理学分野 2) 徳島大学病院 臨床研究推進部 3) 徳島大学病院 薬剤部 4) 島根大学医学部附属病院 薬剤部 5) 広島大学大学院 医系科学研究科 臨床薬理学分野 6) 四国大学 生活科学部 健康栄養学科 臨床薬理学研究室 7) 徳島大学大学院医歯薬学研究所 地域医療薬学分野 佐藤 康敬^{1,2)}, 新村 貴博^{1,2)}, 相澤 風花^{1,2)}, 堀川 伊和^{1,3)}, 八木 健太^{1,4)}, 川田 敬^{1,3)}, 合田 光寛^{1,5)}, 石澤 有紀^{1,6)}, 石澤 啓介^{1,2,3,7)} メチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)は、高齢者や基礎疾患を有する患者では重症化しやすく、院内感染対策の観点からも重要な病原菌とされている。近年、抗 MRSA 薬であるバンコマイシン(VCM)に対する感受性の低下が報告され、テイコプラニン(TEIC)が注目されているが、VCM との有効性の検討は十分ではない。両薬の有用性の比較は MRSA 感染症における治療最適化に重要である。そこで本研究では、JMDC DPC Database を用いて、MRSA 敗血症に対する VCM および TEIC の有用性を比較した。主要評価項目を院内死亡率、副次評価項目を入院日数とし、傾向スコアマッチング後にロジスティック回帰分析により比較検討をおこなった。院内死亡率(26.1%、26.8%)および入院日数(81.5 日、79.5 日)に有意差は認められなかった。今後は臨床的な背景毎に層別化した詳細な解析が期待される。	P2-5 電子カルテベンダー変更に伴う治験患者併用薬チェック支援システムの再構築 広島大学病院 薬剤部 広島大学病院 広島臨床研究開発支援センター 村瀬 哲也, 深川 恵美子, 松尾 裕彰 広島大学病院では、2018 年より電子カルテの治験情報や患者情報と薬剤部門システムに登録した併用注意薬/禁止薬の情報を組み合わせ、院内処方での併用薬を自動的にチェックするツールを運用してきた。2026 年 1 月の電子カルテベンダー変更に伴い、電子カルテ側の治験情報項目や薬剤部門システムへ送信される情報やタイミングが従来とは異なることが判明した。そのため、電子カルテ側の治験情報の項目整理や部門システム側の治験患者マスタ構築等調整を行うことで、チェックツールの継続運用を可能とした。2026 年 1 月から 5 月までに全院内処方のうち 34 件で併用注意薬/禁止薬のチェック機能が作動し、適切な対応により併用薬による逸脱なく治験を支援できている。電子カルテはベンダーにより登録する治験情報や、それら情報を部門システムへ送信するタイミングが異なるが、運用上の工夫と連携により、異なるベンダーで再構築が可能となった。

